

忘れない。
そして
希望の未来を
拓く



FUKUSHIMA MEDICAL UNIV.



公立大学法人
福島県立医科大学



忘れない。
そして
希望の未来を
拓く

公立大学法人 福島県立医科大学

理事長兼学長

菊地 臣一



本学に、従来から求められている大学としての役割は、教育、研究、そして診療です。東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故は、本県の人々の生活やここ福島の自然環境を一変させてしまいました。

本学は、この原発事故により元々求められている役割に加えて新たな歴史的使命を課せられました。それは、本県の人々を放射能による健康被害から護り、長期にわたって見守っていくことです。

この新たな歴史的使命は、人類がまだ経験したことのない未知の領域への挑戦です。今や、原発事故発生から3年が経過しました。2011年3月11日から半年後、本学は、県と一体となって、県民の健康を見守っていく事業を開始しました。そして今、この事業の中核となる拠点に位置付けられている、「ふくしま国際医療科学センター」の建設工事が始まりました。

幸い、県民にとっての、この「健康を護る砦」に、多くの人々が国内外から集ってくれました。政府をはじめ県、そして様々な国内外の関係機関もこの事業の貫徹に全面的な支援を約束してくれています。

この事業は、大規模です。多くの人々の支援が必要です。それでも、長く、厳しい闘いになると覚悟しております。この闘いは、今、福島に住んでいる県民の健康を見守っていく事の他に、もう一つの大きな挑戦があります。それは、次の福島の復興を担う人材の育成です。福島の悲劇を終わらせ、これを奇跡に変えるのは、次代を担う福島の若者です。

我々は、この二つの使命に全力で立ち向かっていくことを、ここにお約束致します。忘れないことと希望を持つことは矛盾しません。夜明けの来ない夜はありません。何十年か後に、県民、国民、そして人類から、このセンターの存在とこのセンターが実施している事業があつて良かった、と言ってもらえるように全力を尽くすことをここに誓います。

平成26年6月1日



福島県知事

佐藤 雄平



福島県立医科大学は、これまで、長きにわたり、高等教育機関として、そして、県内の中核医療機関として本県の医療を支えてきました。また、東日本大震災後は、県民に寄り添いながら健康を見守り、安心を確保する大きな使命を果たしてこられました。

そのおかげもあり、震災から3年が経過し、本県は少しずつ明るさを取り戻してまいりました。県としては、今年を「新生ふくしま胎動の年」と位置付け、新しい福島県の輪郭を示しながらこれを形作っていくための取組を進めることとしております。

こうした中、健康長寿県を目指す本県の復興事業の中核をなす、「ふくしま国際医療科学センター」の整備が本格的に始まることは、誠に喜ばしいことであります。

健康調査、診断・治療はもとより、疾病予防、地域医療支援、これらを支える医療人の育成、本県の課題に応える研究及びその成果の世界への発信と、福島県立医科大学に課せられた歴史的使命は大なるものがあります。県といたしましても、健康長寿県を目指し、ともに前進してまいりたいと思います。

福島県立医科大学が、新たなセンターを始め、県民の健康を守る砦としてこれらの取組を着実に進め、世界に冠たる大学として更なる発展を遂げることを切に期待いたします。

平成26年6月1日



忘れない。
そして
希望の未来を
拓く

誓いの言葉 福島県立医科大学ビジョン2014 「忘れない。そして希望の未来を拓く」

東日本大震災と原発災害発生から3年余、本格的な復興の始まりにあたり、私たちは、この災害を忘れず、風化させず、県民とともに希望の未来を拓くことを誓います。もとより本学は、優れた医療人の教育・育成、医学と看護学の研究推進、そして高度で先進的な医療の提供を使命としてきました。私たちは今、本学本来の使命を再確認するとともに、この未曾有の災害によって与えられた「県民のこころと体の健康を長期に見守り、福島復興の中核となる」という歴史的使命を自覚し、ここに本学の新たなビジョンを提示し、その実現への決意を表明いたします。

1. 私たちは福島の復興を牽引します。

全ての県民の復興が達成される日まで支え続けます。

私たちは、ふくしま国際医療科学センターを中心に総力をあげて、長期にわたる県民一人ひとりの心身の健康の増進、新しい医療産業の創出、地域医療の支援を通して安全で安心な生活基盤を確立し、福島の復興を前進させます。たとえ長期にわたるとしても、私たちは、誰もが復興の達成を感じられる日が来るまで福島県民を支え続けることを誓います。

2. 私たちは福島の復興を担う優れた医療人を育成します。

高度な知識、技術と高い倫理性を備えた医療人を育てます。

私たちは、建学の原点を再確認し、福島の復興を担うことができる高度な知識と技術、そして高い倫理性を備えた医療人の育成を続けます。医学部、看護学部及び大学院の教育カリキュラムを整え、教育力を不断に高め、知識、技能、態度において実践的能力を備えた医療人を輩出します。附属病院と会津医療センターでは、医療の実践により診療・教育力を高め、魅力ある研修プログラムを提供し、総合性と専門性のバランスに優れた医療人を育む生涯教育を行います。さらに、災害に際して世界中から差しのべられた多くの支援に報いるため、将来起こりうる複合災害に備え、災害医療と被ばく医療に精通し、社会コミュニケーション能力を備えた医療人の育成に取り組みます。

3. 私たちは優れた価値ある研究成果を世界に向かって発信します。

本学に課せられた歴史的使命を果します。

私たちは、全ての人々が抱える健康に関する課題を解決するために医学と看護学に関する研究を推進し、その成果を世界に発信します。さらには、原子力災害を経験した本学の歴史的使命として、低線量放射線被ばくの健康影響と心の健康を含む災害医療に関する科学的知見を、人類の未来のために記録し発信します。

4. 私たちは県民の健康長寿を実現します。

高水準の医療の提供と根拠に基づく疾病予防に取り組めます。

私たちは、生涯にわたる健康な暮らしを願う県民の期待に応え、多様な職種の専門性を生かしたチームとして、病める人の自己決定を尊重し、高水準の診断・治療とケアを提供し心温まる医療を実現します。日々研鑽に努め、人々の声に耳を傾け、正しい知識と情報を提供します。県民が健康長寿を実感できるよう、地域と連携し、科学的根拠に基づく疾病予防と健康増進および抗加齢医学の研究と実践を推進します。

5. 私たちは持続的に進化する大学を創ります。

ここに集うすべての人々の思いに応えられる大学を目指します。

私たちは、現状に満足せず、常にあるべき将来像を見据え、組織として進化を続けます。激動する社会の変化に対応し、県民には安心の医療を、学びを求める人々には魅力ある教育と研修の場を、働く人々には誇りを持って仕事に打ち込める環境を提供し続けます。



医学部生誓いの言葉

医学部 4年 細矢 薫子

私たちは本日、福島で医療を志す者として二つのことを誓います。ひとつは、人間として豊かな知性、感性を持った医療人になること。もうひとつは社会とのコミュニケーション能力と高度な専門性を兼ね備えた医療人になることです。

私たちの住む福島は、地震、津波、原発災害を一度に被るといふ世界に前例のない災害を体験しました。それから3年以上を経た今でも、未だ多くの県民の皆様が不自由な生活を送っておられます。そのような福島で医療を学ぶ私たちは、なによりも豊かな人間性を身に着け、一人一人の県民の皆様のところに丁寧に寄り添い、悩みや不安を汲み取り、共に考え、解決できる力を養ってまいります。

さらに、私たちは患者様とのコミュニケーションはもちろんのこと、地域社会とのコミュニケーション能力の獲得にも力を入れてまいります。そして、定期的な家庭訪問や健康教室などの予防医学から、専門性を活かした高度な医療の提供まで、人のこころや社会的側面をも考慮した総合的な診断や診療ができる全人的な医療の実現を目指します。

私たちは多くの県民の皆様との共感を大切に、必要とされる最適な医療をタイムリーにお届けできるよう、研鑽を積むことをここに誓います。

看護学部生誓いの言葉

看護学部 3年 高崎 洋彰

一瞬にして、これまで積み上げてきた多くの大切なものを失ったあの日から3年以上の月日がたちました。しかし今でも、福島県には健康に関する不安や心配を抱えた多くの県民の皆様がおられます。長期にわたる避難生活と生活習慣の変化から生じる健康上の問題や課題を抱えておられる方。医学的な疾患が顕在化していなくても、何らかの支援を必要とされる方。

そのような福島でこれから医療に携わる、ということは、私たちにとって大変特別な事です。多種多様な不安や心配に、私たちはひとつひとつ向き合い、県民の皆様を医療の面から支えていかななくてはならないという使命感を感じています。そして、単に知識と技術を習得するだけでなく、福島県民の一人として、共に学び、共に考え、共に歩いていくことこそが私たちの責務です。その先に、より一歩進んだこれからの医療や看護の在り方が見いだせるものと信じています。

だからこそ、私たちはこの責務をやりがいに変え、しなやかさとたくましさを持った医療人となることを誓います。



忘れない。
そして
希望の未来を
拓く

ふくしま国際医療科学センター

福島復興を医療の面から支える

設立の背景

2011年3月11日に発生した東日本大震災とそれに続く東京電力福島第一原子力発電所事故によって、福島県では自主避難を含めて16万人を超える県民が避難し、将来に対する不安を抱えながら暮らしている状況にあります。また、放射性物質による環境汚染や風評被害は、県内産業にも多大な打撃を与えるなど、本県の安全と安心を根底から揺るがすものとなっております。

こうした状況の中、公立大学法人福島県立医科大学は、災害発生以降、震災患者の受け入れ、二次被ばく医療施設としての役割を担うとともに、全県民の皆様を対象とする健康調査を福島県から受託、実施するなど、県民医療の中核機関としての役割を果たしてきました。これらの背景を踏まえ、本学では2012年11月20日に、ふくしまを愛し、

ふくしまに心を寄せる国内外のすべての人々の力を結集し、復興に向けた医療の拠点となる「ふくしま国際医療科学センター」を発足いたしました。

最先端の医療機器を備えた医療の砦

本センターは、県民健康調査の着実な実施、最先端の医療設備と治療体制の構築、世界に貢献する医療人の育成等に加え、医療関連産業の振興により、地域社会を再生・活性化し、その復興の姿を全世界に向けて発信する主導的役割を担うことを目的としております。5つのセンターと部門で構成される本センターは、互いに連携しながら新しいふくしまを拓いて参ります。



ふくしま国際医療科学センター



A棟

◆教育・人材育成部門
◆医療-産業トランスレーションリサーチセンター



B棟

◆先端臨床研究センター
(動態環境調査部門)



C棟

◆先端臨床研究センター



D棟

◆放射線医学
県民健康管理センター
◆先端診療部門



理事（復興担当）

竹之下 誠一

県民の心と体の健康を見守り続けます

ふくしま国際医療科学センターの中でも「先端診療部門（病院部門）」と連携する「先端臨床研究センター」は、体の中を画像化して病気の診断や治療をする核医学といわれる最先端医療と緊急被ばく医療の融合をテーマのひとつとして設置されました。日本のトップレベルの臨床と研究をさらに推し進めるとともに新たな治療法を開発し、これまで日本では「できなかった」あるいは「弱かった」ジャンルまで含めてここ、ふくしまに集約し、世界に発信します。県民の皆様には、身体に負担の少ない最先端の診断や医療を受けていただく可能性が広がります。

また、国内では初めてとなる最先端医療機器であるPET-MRI やPET-CT が導入され、活躍し

ます。同時にPET 診断・治療薬剤を製造するためのサイクロトロンも2台設置し、すべての医療活動がスムーズに進む環境を整えました。

さらに臨床研究・治験センターも備える本センターでは、GMPやGCPなどの国際基準を遵守することで、安全性と信頼性を確保し、医療と産業の連携に貢献して参ります。このように世界最先端の診断・治療・研究の体制を整備することで、世界中から各分野におけるトップレベルの人材の集結が実現します。本センターの稼働が大きな安心となり、ふくしまを活性化し、将来にわたって県民の皆様に寄り添い、心と体の健康を見守り続けます。

①【放射線医学県民健康管理センター】

住み慣れた福島で、健康に安心して暮らしていただくために、県民の皆様の心身の健康を長期に見守り、健診や調査、ケアを行います。

②【先端臨床研究センター】

県民の皆様へ最先端の医療サービスの提供と、地域医療の再構築や早期診断および治療を実現します。

③【先端診療部門】

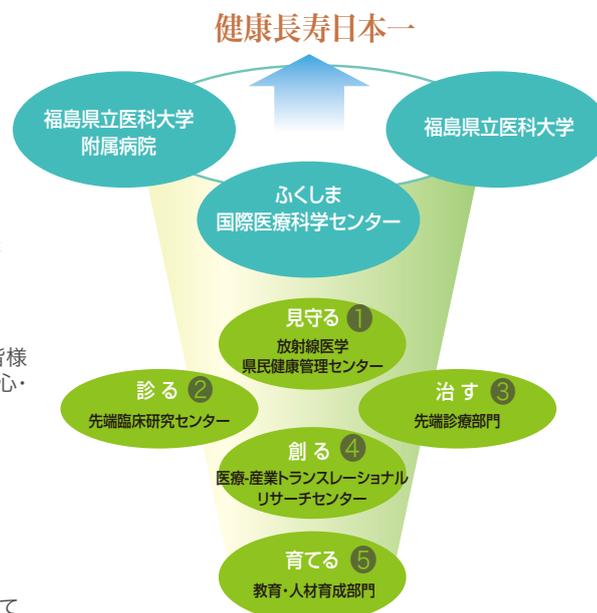
震災と原発事故によって子どもや女性をはじめ、県民の皆様が懸念される健康影響に対応した診療科を充実させ、安心・安全な医療を提供します。

④【医療-産業トランスレーショナルリサーチセンター】

医療界と産業界の橋渡し役となり、新薬開発や医療機器開発を支援します。

⑤【教育・人材育成部門】

県民の皆様の健康を生涯にわたって支える人材を育成してまいります。





忘れない。
そして
希望の未来を
拓く

使命を果たすために・・・

私たちは福島復興を担う優れた医療人を育成します。

県全体でバランスの取れた医師を育てます

直近の課題は、自らの果たすべき役割を自覚した自主性の高い学生を育てることです。学生と教員の距離が近く、情報なども共有しやすい好環境を生かし、学生の意見を反映した教育システム作りを進めています。医師不足という大変な状況の中、自由闊達に意見を述べながら、その分の責任もきちんと果たせる意識の高い学生を育てて世の中に輩出したいと思っています。次に、総合性と専門性のバランス感覚の優れた医療人を育む生涯教育です。今、日本全体で総合医が足りないと言われていています。これからは、地域で暮らす皆さんの健康を誕生から終末期まで、軽い病気から重い病気まで全てを診られるような総合性と専門性を兼ね備えた医師が求められるようになります。こうした状況を踏まえ本学では、学生時代はもちろん卒業後



医学部長
錫谷 達夫

の初期・後期研修、その後の生涯教育まで、県内の病院と協力しながら研究心に富むバランスの取れた医師を育てて行きます。このような連携ができるのは県立ならではのこと。県全体で手厚く人材を育てて参ります。

探究しつづける質の高い看護専門職の育成

時代のニーズにそった看護を提供できる質の高い看護専門職の育成、自分のキャリアをデザインし探求する看護職の育成が求められています。看護の場は、多様化し、役割も期待も大きく、高い看護実践能力やしなやかさが求められています。看護の対象となる方々を尊重し、その多様性と個別性を理解すること、看護を提供する過程で根拠に基づいて実践すること、さらに継続することが必要だと考えます。そのためにも、

- 理想を掲げたキャリアデザインをもつ優れた看護実践者
- 考える力・表出できる優れた看護実証者
- 看護の「知」と「技」について、繰り返しにより集



看護学部長
眞壁 玲子

積できる優れた看護探求者
これからの看護を担う人たちに習得してほしいと考えています。

新設講座「災害こころの医学講座」の役割

震災当時避難区域にいらした住民の皆様の中には、これまで一緒に生活をしていた家族が離れ離れになったり、職を失うなどの不自由を余儀なくされた方が多くいらっしゃいます。その結果、震災後3年以上を経た今でも、人生の目標や働く意欲を失い、外出や畑仕事、料理といった何気ない日常生活の維持までも困難となってしまった方が少なくありません。

このような生活習慣の変化は体への影響と同時に、こころの状態にも非常に大きな影響を与えています。実際にうつなどの症状を示す方も多くいらっしゃいます。私たち「災害こころの医学講座」は、このような県民の皆様のごころの健康を見守り、必要とされる方にケアやフォローをすること、災害におけるメンタルヘルスの在り方について考え、人材を育成することを目的として新設された講座です。このような講座は日本でも非



教授

前田 正治

常に珍しいものです。

現在は、何よりもこころの問題を抱えた方々への適切なケアや支援が最優先です。そこで、既に支援に携わっている地域の保健関係職員さんや医療スタッフの皆さんのより専門的なスキルの向上をお手伝いし、支援の質を向上させることに注力しています。ふくしま心のケアセンターなどの支援機関との連携を強化し、自殺やアルコール依存といった深刻な結果に陥る方を少しでも減らせるよう、お役に立ちたいと努力をしているところです。

長期の取組になると覚悟していますが、将来は、世界のモデルとなるような災害におけるメンタルヘルスの仕組みを作り、多くのエキスパートを日本のみならず世界に輩出したいですね。



新実習棟竣工

本学では、医学部生の定員枠の増加に伴い手狭になった実習施設を新たに建設し、2014年2月に竣工しました。課題解決能力に優れ、実践的能力を備えた医療人を育成、輩出することが、本学の使命です。そのために綿密に用意されたカリキュラムや多様な研修プログラムを誰もが遅滞なく受講できるための設備として、スペース的にも余裕のある実習施設は必要不可欠でした。今回の新実習棟の完成により、これまでにも増して充実した教育、研修の実施が可能になりました。



忘れない。
そして
希望の未来を
拓く

使命を果たすために・・・

私たちは優れた価値ある研究成果を世界に向かって発信します。



理事
(教育・研究担当)
兼副学長

福島 哲仁

優れた人材の育成と研究環境の充実が福島の未来を作ります

本学には免疫学領域、脳神経学領域、細胞生物学領域、がん研究領域等において優れた世界に誇れる研究成果の蓄積があります。最新鋭の研究機器とそれを扱う優秀な人材も揃い、ハードとソフトの両面の充実がこれらの研究の遂行を可能にしています。

再生医学分野では、既にiPS細胞を用いた組織や器官の再生を目指した研究が始まっております。また、企業や市町村との研究連携は、寄付講座として臨床応用に結びつく最先端の研究、あるいは医師不足を支援するなど成果を挙げつつあります。さらに今後、ふくしま国際医療科学センター内に「医療—産業トランスレーショナルリサーチセンター」が研究拠点として整備されます。福島県が世界の先端医療産業の拠点となり、その研究の中心的役割を本学が果たしていかなければならないと考えています。2011年の震災と原子

力発電所事故から得られた教訓・知見を後世に伝えるための研究成果の発信も本学に課せられた重要な歴史的使命です。

看護学部では、震災直後から災害避難者の健康支援を行っておりますが、その取り組みの評価から多くの教訓を得、研究成果として発信しています。予防医学とともに、これからもその成果を県民の皆様に届けて参ります。次世代の医学・看護学研究を担う人材の育成も重要です。

現在、医学研究科に災害医学や放射線医療に関する専攻(修士)を新設する準備が進められています。我が国の災害医療の最前線で活躍する人材を福島の地で育て、その実践に役立つ災害医学を追求する教育・研究拠点として期待されております。



医療界と産業界の橋渡し役となり、新薬開発を支援します



医療－産業
トランスレーショナル
リサーチセンター
センター長

和栗 聡

医療における一般的なTranslational Research(TR)とは、基礎研究から臨床研究への橋渡しです。福島モデルと言われる本センターの特徴は、医療と産業の連携の可能性を追求するものでセンター名も「医療－産業トランスレーショナル リサーチ(TR)センター」としました。創薬を進める上で、企業が取り組めない解析や実験を行う日本初のセンターです。

本センターでは、企業の要請に応じて様々なものを提供します。血液や手術で摘出した臓器などもそうですが、人の検体は放って置くとどんどん変わってしまい、実験に使えなくなります。また、たとえ速やかに凍らせても受け取った企業で先端的な解析ができるかという、そこはまた別の問題になってきます。企業における数々の創薬研究も得意分野や経営方針などにより偏りが生まれ、スムーズに進むとは限りません。その一方で治りにくい病気で苦しんでいる患者さんをなんとかかしたいと思っている私たちアカデミックの研究者がいます。そこで本センターが医療界の言葉と産業界の言葉の微妙で大きな違いを「翻訳」して互いに分かりやすく伝えたり、研究する上で薬の

開発を遅らせている原因を見つけ、それを取り除く手助けを行います。

ここで重要なのは、「分かる」ことです。患者さんにとっても同じです。例えば、いくら検査をしてもどんながんなのか分からない場合があります。本センターの最先端の解析が治療の判断の参考になったり、選択肢の幅を広げることにつながったりしています。「分かる」ことは生きる希望、家族の方々の安心にもつながります。私たちのもう一つの成果が産業振興とそれに伴う雇用創出です。この取り組みを通して日本初の新薬開発に貢献していきたいと思っています。





忘れない。
そして
希望の未来を
拓く

使命を果たすために・・・

私たちは県民の健康長寿を実現します。



理事
(医療・臨床教育担当)
兼副学長

紺野 慎一

医療設備と医療環境の充実が福島の未来を作ります

私たちは深く傷ついた福島県で「何ができるのか」を絶えず自問してきました。目指すのは「県立医科大学があるから、安心して福島で産み、育て、暮らすことができる」と感じていただくことです。そのためには、何より最先端の高度医療設備を備えることが求められます。特に「子ども」「女性・お母さん」「高齢者」を対象とした医療設備の充実が必要不可欠です。また「救急医療」体制の充実も急務です。「ふくしま国際医療科学センター」は、国内トップクラスの医療設備と体制を整えることで、これらの課題を解決していきます。

そして、私たちは高度医療の提供だけでなく、「医療環境の向上」でも最先端を行く取り組みを行います。例えば「子ども医療センター」です。これは福島県初の小児専門医療設備ですが、単にそれだけではなく、子どもさん達のためのイベント

ホールやプレイルーム、学習机を備えた部屋なども備える予定です。あるいは「女性病棟」の設置です。女性のみが入院、出入りできる病棟で、周囲の目を気にせず、少しでも楽な気持ちで入院生活を送っていただくことができます。「血液内科病棟」はスペース全体をクリーン度の高い状態にあります。これまでは病室の外に出ることができなかった患者さんも、部屋にこもることなく移動できるスペースを用意しました。

このように医療設備、体制の充実に留まらず、そこに入院する方々の環境にも最大限配慮をすることで、真の最先端を目指していきます。県立医大の進化が福島復興を「可視化」し、県民の皆様の希望の未来を拓く一助になれば幸いです。



小児、救急、女性医療の充実

「子ども」「女性・お母さん」「高齢者」を対象とした医療の充実と救急医療体制の整備

ふくしま国際医療科学センターに整備される病棟は、この福島の地で、県民の皆様の健康を守り支えるための医療の砦として最先端の高度医療設備を整えると同時に、療養環境の整備にも配慮がなされています。

1階 高度救命救急センター

東日本大震災の教訓から、大規模災害現場において、ドクターヘリのみならず電源や飲料水や食料、通信手段などを備えていち早く医療を始めるための車両「DMAT Car」を配備。県内に限らず、全国、海外へも出動可能な規模と機能を持っています。



DMAT-Car

2階 小児、産科・婦人科外来、 甲状腺センター等

甲状腺センターでは、広いスペースの診療室を用意。医師と患者さん、ご家族の方々が一緒に、詳しい説明を受けていただきやすいように配慮しています。



甲状腺検査風景

3階 総合周産期母子医療センター

フロア全体がお母さんと子どものための設備となっています。

4階 女性病棟、血液内科病棟等

入院や出入りを女性に限定したスペースや、高いクリーン度を保った広いスペースなどが設けられます。女性の患者さんが男性の目を気にせず楽な気持ちで診察、入院ができたり、これまで病室からの外出を制限せざるを得なかった患者さんが、歩くことのできるスペースを確保するなど、院内の医療環境整備に注力しています。



忘れない。
そして
希望の未来を
拓く

使命を果たすために・・・ 将来にわたる県民の皆様の健康見守り



副理事長
(県民健康管理担当)

大戸 斉

放射線医学県民健康管理センターの使命

本学では震災以降、県民健康調査を実施してきましたが、その結果から次第に県民の皆様の抱える健康面の課題が見えてきました。避難による不自由な生活やストレス、不安などに伴い、震災時避難区域に指定された市町村の住民の皆様には、高血圧、高脂血症、肥満傾向、うつ傾向などが疑われる方が認められます。

当センターでは、基本調査(=外部被ばく線量の推計)、甲状腺検査、健康診査、こころの健康度と生活習慣に関する調査、妊産婦に関する調査という5つの検査や調査を継続して行い、震災前の住民の皆様への健診結果などと比較、解析し、客観的な視点で県民の皆様健康面における問題点を見つけ、市町村と連携して健康管理のための対策や提案を進めています。

このような検査や調査は長期にわたって繰り返し継続して行うことが重要です。一人一人の数値の変化を追い、問題点、課題点を自ら把握し、対

策を講ずることができるからです。そのためにも、当センターは単に調査、検査を行うだけでなく、今後は、その結果を県民の皆様や市町村の保健関係部局と共有し、一緒になって健康に対する関心を喚起、啓発していく活動も新たな使命となると考えています。

震災から3年がたち、多くの若者たちが、新たな目標を定めて走り出していることは心強い限りです。そういう若者たちの未来を、この健康調査事業を通して後押しすることも、私たちの役目でしょう。

福島県立医科大学は福島県民のために設立された大学です。これまで多くの県民の皆様に支えられながら発展してきました。いまこそ、私たちがその恩返しをする時と意識しています。県民の皆様への心身の健康のために力を注いでいく決意です。



使命を果たすために・・・ 地域医療体制の充実に向けて



理事
(企画・地域医療担当)
兼副学長

八木沼 洋行

志高く、地域医療の充実に尽力して参ります

「どこに住んでいても健康に安心して過ごしたい」と誰もが願っています。その実現のために提供される医療、保健、介護、福祉などの活動をまとめて「地域医療」といいます。本学は、福島県の地域医療の最後の砦として、高度で先進的な医療を県民の皆様提供することで、健康で安心できる暮らしを支えています。救急医を乗せて現場に駆けつけるドクターヘリをいち早く導入したのもこのためです。

震災によって、福島県の7つの地域医療圏の多くで、医師・医療スタッフ不足が加速しました。なかには医療崩壊となったところもあります。これに対し、本学は、様々な枠組みで支援を行っています。なかでも、「地域医療支援等助手制度」は、10年前に只見町で起こった「医師不在」という事態をきっかけに、全国に先駆けて導入された福島県独自の制度です。これはその後拡充され、現在、90名余の医師が各地域へ支援に赴いています。

もう一つの特徴的な仕組みは、自治体等の寄附によって設置された「寄附講座」による支援です。「災害医療支援講座」は、震災で崩壊状態となった浜通りの医療支援を目的に作られました。現在、他に3つの講座が作られ、それぞれに医師が高い志を持って働いています。

未来の地域医療を担う人材を育てるのも本学の大きな使命です。医学部の入学定員はこの7年で80名から130名に増えました。この中には「地域枠」があり、県内での将来の活躍を約束している頼もしい学生達が大勢います。また、これからは、救急も含めて幅広い健康上の問題に対応できる総合診療医(家庭医)の養成も重要です。総合診療医が地域医療の第一線で各領域の専門医と連携して働く形ができれば、地域医療の充実につながります。私たちは、これからも限られた資源を大事に有効に機能させながら地域医療の充実に尽力して参ります。



忘れない。
そして
希望の未来を
拓く



福島県立医科大学

〒960-1295 福島県福島市光が丘1番地

TEL 024-547-1111 (代表) <http://www.fmu.ac.jp>

FUKUSHIMA MEDICAL UNIVERSITY

1 hikariga-oka, Fukushima City 960-1295, JAPAN